

研究 代 表 者	所属学系・職名 生物・農学学系・教授 氏 名 黒沢 高秀
研 究 課 題	福島県内旧制中等学校等の植物標本類の現状把握と植物学的・教育学的分析 Botanical and pedagogical study on herbarium specimens from elementary, secondary, and high schools in Fukushima Prefecture.
成 果 の 概 要	<p>【研究の背景, 目的】</p> <p>代表者の研究室に県内の3高等学校の植物標本が廃棄寸前のところで関係者により相次いで持ち込まれたことがあった。その時, 学校に保管されていた標本は, 教育史あるいは過去の生物多様性の資料としての貴重性が認識されないまま消失していることを知った。また, 旧制中等学校等の博物に用いられた標本など, 学校に保管されていた標本の由来や行われていた教育との関連に関して, ほとんど研究がなされていないことも知った。そのため, 本研究では, 県内の学校が保管する植物標本類の概要を明らかにすることを目的に, 植物標本に関する高等学校へのアンケート, 学校植物標本の整理・データベース化, 学校植物標本の概要分析, 学校植物標本の教育学的分析を行った。</p> <p>高等学校に保管された植物標本</p> <p>福島県内の100高等学校を対象に, 標本類に関するアンケートをとった。依頼は各高等学校の校長・理科担当教諭宛に手紙で行い, 同封の用紙または設置したウェブサイトを通じて回答してもらうようにした。回答数を増やすため, 知り合い等を通じた協力の呼びかけも行った。アンケートでは, 生物実験室等での植物標本の存在の有無, 存在している場合は種類と量, 保管状況, 活用状況, 寄贈の希望や調査の可否などに関する設問を立てた。現在までに, 23校から回答を得た。それによると, 3校に230枚の植物標本が保管されていること, これらの中には, 標本教材業者である京都科学標本株式会社のものも含まれていることがわかった。また, 残念ながら既に多くの高校で植物標本が失われてしまったことが明らかとなった。</p> <p>アンケート以外でも情報を収集し, 福島県師範学校博物学教諭であった根本莞爾の門下生である服部保義が1889~1936年に採集した約1,000点のさく葉標本が田村高等学校に保管されているとの情報を得た(阿部武氏私信; 阿部・鈴木 2022)。</p> <p>学校植物標本の整理・データベース化</p> <p>福島県内の中学校から寄贈された標本, および生物担当教諭等学校関係者から寄贈された学校標本や個人標本の整理を行い, ラベル情報をデータベース化した。これらのデータは, 国際的・全国的生物多様性情報データベースであるGBIF (https://www.gbif.org/ja/) およびサイエンスミュージアムネット (https://science-net.kahaku.go.jp/) に提供され, ウェブ上で公開される予定である。また, 標本画像は, デジタル標本館 (http://tayousei.life.shimane-u.ac.jp/) に提供され, ウェブ上で公開される予定である。</p> <p>学校植物標本の概要と教育学的分析</p> <p>標本のラベルデータを集約し, 由来を類型化した。また, 学校周辺で採集したものについては, 福島大学貴重資料保管室植物標本室FKSEのデータベースと比較して, 現在の植物の分布状況と比較し, 絶滅種, 絶滅危惧種を抽出するなど分析を行った。その結果, 夏休みと思われる期間に学校周辺で生徒が採集したものが</p>

ほとんどである場合、生物部の採集旅行など遠方で採集したものが含まれる場合、島津製作所等標本教材業者から購入したものがほとんどである場合など、学校によって様々であることがわかった。標本教材業者も、これまでよく知られていないものが含まれることがわかった。

元校長の植物コレクション（田口亮男コレクション）中の、現在のいわき市にあった大浦尋常高等小學校の標本内に、1909年に付近の海岸で採集された植物があり、その中には県内で絶滅したヒメキンポウゲ（キンポウゲ科）が含まれているなど、当時の海岸の植物多様性を知る貴重な資料であることがわかった。当時発表された論文の内容なども分析し、その頃の福島県の海岸の植物多様性の状況をまとめ、大学紀要に発表した（黒沢・根本 2022）。

大浦尋常高等小學校の標本は、赴任してきたばかりの訓導（田口亮男）自身により、あるいはその指導の下で作成・管理されたものであった。訓導の福島県師範学校在籍中の言動、赴任後の地域の自然や民俗の調査などから、この標本の郷土教育への利用や、当時の博物教育への訓導の関わりなどについて分析した（黒沢・根本 2022）。

研究の波及効果

本研究の過程で、静岡県立清水東高等学校に保管されていた標本の分析を行っているグループと学校標本に関して共同研究を進めることになり、標本教材業社から購入された標本の分析などを行った。論文を執筆し、学会誌に投稿中である。これまでほとんど注目されてこなかった標本に注目し、研究対象にする動きが加速されると期待される。

日本植物分類学会研究・普及推進委員会（研究代表者が委員長）に標本チームを設けることになり、事業の1つとして学校標本の調査、分析、保全が位置づけられた。

引用文献

阿部武・鈴木恵美子. 2022. 服部保義標本研究. 自費出版.

黒沢高秀・根本秀一. 2022. 田口亮男資料に基づく1901～1910年の福島県における海岸植物の種多様性の状況. 福島大学地域創造 33(2): 91-104.